

傷害分析 16-17 シーズン

びわ湖バレイ、朽木、箱館山、奥伊吹、国境、ヨゴ高原の6スキー場の入り込み数は204万人（2015シーズン）12.6万人（2016シーズン）、18.1万人（2017シーズン）であった（図1）。2016シーズンのような極端な雪不足はなく、比較的雪に恵まれたシーズンであった。

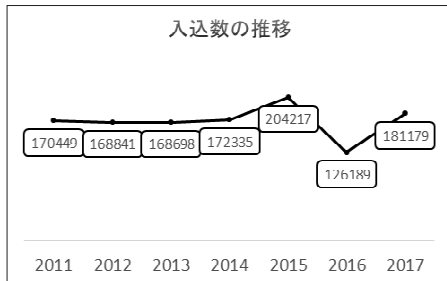


図1

けが人数は2011から2017シーズンの順にスキーヤーが85、31、51、65、59、42、68人、ボーダーが197、124、118、151、210、129、192人であった。2012-2016シーズンは比較的減少していたが、2017シーズンは2011シーズン並みに増加した（図2）。

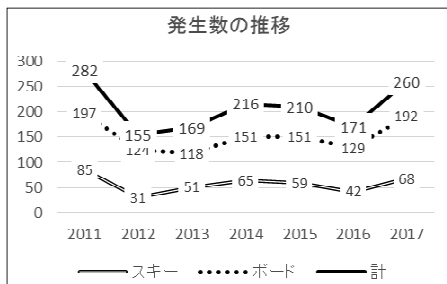


図2

入り込み数1万人当たりのけが人数は、2011から2017シーズンの順にスキーヤーが5.0、1.8、3.0、3.8、2.9、3.3、3.8人、ボーダーが11.6、7.3、7.0、8.8、7.4、10.2、10.6人、総計では16.5、9.2、10.0、12.5、10.3、13.6、14.4人とやや増加した（図3）。

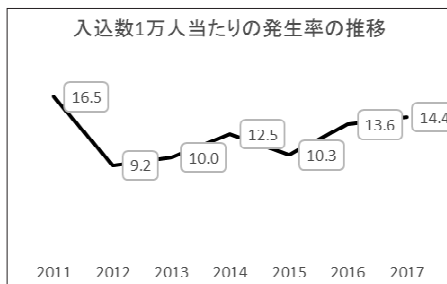


図3

2017シーズンの入り込み数1万人当たりの発生数をスキー場別にみると、ヨゴ高原、奥伊吹、びわ湖バレイ、国境、朽木、箱館山の順に、23.1、19.8、17.7、7.3、5.8、3.8人であった。入込数と発生率は正の相関を認めることが多いが、ヨゴ高原は入込数が少ない割に発生率が高く、原因の究明と対策が望まれる（図4）。

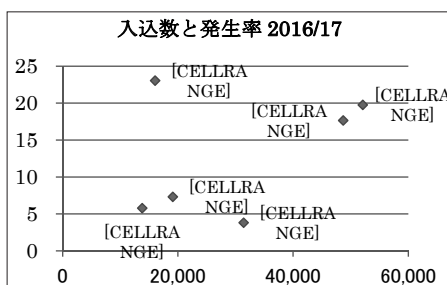


図4

曜日別では土曜76人、日曜61人、水曜38人、その他の曜日17-26人であった。土日に多かったのは混雑度によるものであろう。

傷害程度では、期間内のけがによる死亡者は0であった。重傷者はスキーヤーが7人、ボーダーが21人、計28人とこの7年間で最多であった。22人（78.6%）は肩、上腕、肘、前腕、手首の脱臼または骨折であった。

受傷部位ではスキーヤーは膝が最も多かった（図5）。次いで下腿、頭の順であった。ボーダーは手首が最も多く、次いで肩、頭、肘の順であった（図6）。スキーヤーは右34に対し左26、ボーダーは右74に対し左76と左右差は認めなかった。受傷原因としては、スキーヤー・ボーダー共「バランスを崩して」が最も多かった。ボーダーはそれ以外に「転倒・滑落・ジャンプ・トリック失敗」が32人含まれていた。

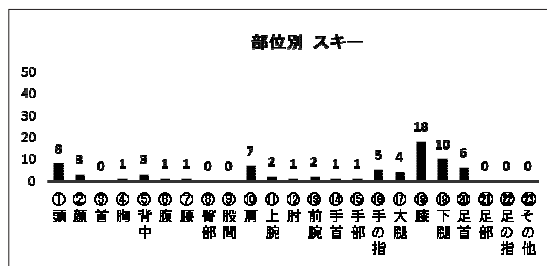


図5

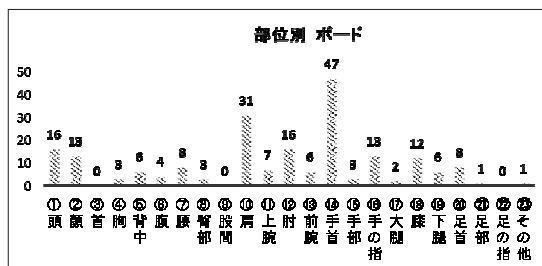


図6

他人との衝突によるけがは、37件であった（図7）。スキーヤーはスキーヤーとが3人、ボーダーとが8人、その他の人とが1人であるのに対し、ボーダーはスキーヤーとが1人、ボーダーとが21人、その他の人とが1人であった。ボーダーとの衝突によるけがが29件と全体の78%を占めていた。

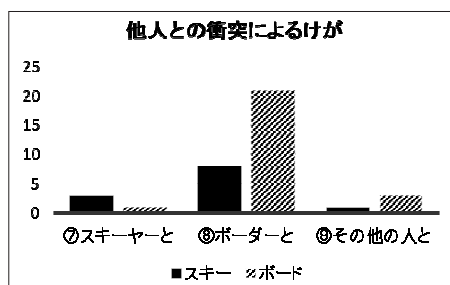


図7

相手に対する賠償責任保険に加入している、と答えたのは、スキーヤー5.9%、ボーダー1.6%と極めて低い。スキー場での衝突事故は被害者の『泣き寝入り』となることが多く、今後の課題である。

データの未記入は以前より多いが、今回は若干の改善が見られた。スキー場別にみると、『年齢の記録漏れ』は0-12%、『現場→救護室・駐車場の記載なし』件数は0-11%で一昨年、昨年に比べ大幅に改善した。また、記載漏れが多いのは2スキー場のみである。減少したとはいえ、1項目でも記録漏れがあると正確な事故原因の分析ができない。記載なしの項目を無くすよう更なる改善を求めたい。

対策としてヘルメット、ゴーグルなどの推奨がまず重要である。また、最近スキー上級者における膝周辺骨折が増加しており、過度に強い解放値とならないよう、ビンディングの解放強度の指導がさらに重要である。ボーダーに関してはパッド入りのウエアや肘・手首等の防具の普及、ジャンプ台周辺での安全指導の必要性を感じる。

従来からの注意喚起を継続すると共に、中高年スキーヤーの増加に対応する、スキー場の安全管理への取り組みを均一化すること、が急務と考える。

また、スキー場間でけがの発生率が大きく異なっている。ゲレンデ面積、リフト運行能力、地形の違いを反映しているものと思われるが、発生率の高いスキー場は更なる原因分析と対策が望まれる。

滋賀県スキー連盟 安全対策部 ドクター委員会 藤田 裕